

●義父母の介護・告別 九三年四月～九四年一月

わが娘に花愛でるころありやと 真剣に問う卒寿翁

おうおうとただ呻くだけわが義母（はは）よ 病室暗く花冷えの朝

（義母は脳梗塞で言語障害があった）

老親の介護に明け暮れ忘れたり 今日わわれらが結婚記念日

電話中突如応答途絶えたり 義父（ちち）を案じて世田谷に疾ぶ

（八月十四日夕方）

応答（こたえ）なき義父（ちち）を案じてこじ入れば 玄関前に倒れてありき

救急車運び込まれし病院は 義母（はは）寝たきりの病院なりき

死に近き義父の独語はシベリアの 極寒の地のつらきことども

「生きて帰れて夢のよう」と 五十年前を喜ぶ死に近き義父

ぜえぜえと苦しむ義父の口開けて たまりし痰をとるぞ哀しき

この部屋に利也が迎えに来ていると 何度も呟く死に近き義父

（東大卒の自慢の息子だったが三年前大動脈瘤で急死した次男）

あらたまの年に背を向けわが義父は 大晦日の朝一人旅立つ

卒寿まで一月残しわが義父は 眠るがごとく人生を閉ず

死に臨むわが義父の顔仏なり 孫ら案じて菩薩のごとし